

「忘れないために」

小原木中三年 梶川 裕 登

皆さんは、以前の気仙沼の街並みを思い出せますか。僕は、はつきりと思い出すことができませぬ。今の景色を以前からあった景色として錯覚してしまっているのです。それに気付いたのは、小原木中学校での活動からでした。小原木中学校では、海拔表示プロジェクトを行っていきます。その場所が、海拔何Mなのかを調べ、電柱など見えるところに、このよきな表示板を取り付けていきます。海拔を意識し、どの高さまで逃げればよいのか、参考にしてもらおうと考えたプロジェクトです。調べてみると、小原木中学校は海拔七十M。気仙沼高校は、四十・五M。市立病院は一三・八M。エースポートは〇・八Mでした。僕が住む只越地区の津波の最大値は二七・六M。海拔五・二Mしかなかった僕の家は、もうありません。

僕達はまず、この表示板を中学校のある館地区に取り付けました。この地区はほとんどが海拔二十M以上で、被害の少なかった場所です。次にそのとなりの大沢地区への取り付け。ここは、海と少し離れていても多くが海拔二M程度で、大きな被害のあった地区です。取り付け作業の中で、僕は、変わり果てたこの地区の姿を見ながら、言いようのない不思議な感覚に襲われていきました。それは、草が生い茂る、何もなくなつたこの景色を見て、全く違和感を感じなくなつていくのです。それどころか、今の景色にすっかり慣れてしまつた自分がそこにいるのです。あたかもこの景色は、僕が生まれる前からずっとこうだつたんだと。いや、それは違う。こんな姿ではない。ここには僕の友達の家があつて、漁港から見える海はもう少し遠く低くて、コンビニはここにはなかった。かつて過ごしてきた風景が、僕の頭の中から薄れていってしまふ。取り付けをしながら、何が以前で、何が

今なのか。何が変わって、何が変わっていないのか。その後、何かに誘われるように、かつての自分の家があった場所に行って見ました。今残っているのはコンクリートの土台だけ。ここで生活の営みがあったなんてこれぼっちも感じられませんか。でも、この景色にも何の違和感を感じない自分がそこに立っていました。ここには、皆で笑った家があったはず。地域があつたはず。そして、笑顔のおじさんがいたりしなくていいのに、十年以上も暮らした環境を感覚を失いつつある自分がいたのです。僕を今まで育ててくれたこの温かな場所を、心の片隅から消しきってしまったのかと、自分自身がとても怖くなりました。人は忘れてしまうもの。慣れてしまうもの。悲しみの中にいつまでもいてはいけない。切り替えて前に進まなくてはいけない。辛いけれど、震災があつたことを、そこに町があつ

たことを、僕達は忘れず、しっかりと伝えてい
かなくてならないと思うのです
「忘れないために」その一つの手立てが、
海拔表示プロジェクト。身を守ることの大切
さを伝えながら、地域を回り、昔の景色、育
った環境、地域の温かさを、もう一度確認し、
そして伝える。
僕は、これから、ここにどんな人達が住
んでいたのか、どんな町があったのか、そし
て震災でどんな被害を受けたのかを後世に伝
えていきたいと思っています。それが、海と
一緒に生活していく僕たちの役目だと思っ
ているから……。